す。英語(ママ)では平和を語り得ない時代がまた来そうなけはいがしておりますから」とは、イシガが三宅史平へ送った手紙である。

「反戦的流言」のかどで金沢憲兵隊に検挙された松田周次の事件もこの時代のことであった。たしか執行猶予になったはずである。同氏の夫人久子もエスペランチストで、東京で在学中は学生運動の闘士であった。

注

1 松葉菊延「七人の隠密にかこまれて」Nova Rondo 第一三号 一九六九年七月。
2 川崎ナオカズ「一九三八年のある事件」Nova Rondo 第一二号 一九六九年四月。
3 野島安太郎「Tempo のこと」La Movado 一九七一年一二月号―七二年一月号。
4 永井叔『大空詩人』一九七〇年 同成社（十数年前の謄写印刷の私家版あり）。「反戦のための闘争開始」『朝鮮研究』一九六九年三月号 日本朝鮮研究所。
5 内務省警保局保安課『特高月報 昭和十八年十月分』一九四三年。復刻版 一九七三年 政経出版社。
6 イシガ・オサム『神の平和』一九七一年 新教出版社。
7 イシガ・オサム「憲兵と兵役拒否の間」『文芸春秋』一九六六年三月号 文芸春秋社。
8 この団体については、日本友和会『良心的兵役拒否』一九六七年 新教出版社、阿部知二『良心的兵役拒否の思想』一九六九年 岩波書店。
9 7と同じ。
10 内村鑑三『非戦主義者の戦死』一九〇四年。ただしここでは阿部知二の前掲書より。
11 阿部知二 前掲書。
12 三宅史平「石賀修さんについて」La Revuo Orienta 一九六六年七月号。

第九章 戦う中国で――長谷川テルの生涯

長谷川テルの著書『戦う中国で』（1945年，重慶で発行）

もしもザメンホフがもう一度この世によみがえったとしたら、やはり昔と同じように、何をすればいいかがわからずに、書斎に座って外界の嵐を嘆いていたでしょうか。いいえ、決して。こんな時になおも「平和の戦士」として朽ちていくためには、彼の心はあまりにも人間的でした。彼の大きなあたたかい手が最初に固くにぎりしめるのは、まちがいもなく、あなたの血まみれの大きな手です。

スペイン人民戦線軍にあって戦うエスペランチスト、ローゼネルン・マンガダ将軍へ

長谷川　テル

奈良女高師の文化サークルで

「全農全国会議全国委員藤本忠良は昭和六年八月大阪市に於ける全国会議近畿地方委員会に出席の際、党員本庄博信、小松七郎等の勧誘により入党し、党奈良県オルグ及び農民部関西オルグを命ぜられたりしが、その組織は進展せず、本年八月に至り遠藤陽之助（全農県連書記）を獲得し、奈良地区青年部責任者となし、また原田兵次郎（全国会議派幹部）は本年五月八日入党し、アジプロ及び赤旗配布を担任し、かくて全国会議派、奈良一般労働組合、コップ系諸団体中の優秀分子の獲得に努めおりしが、八月三十一日検挙せられたり。

また矢部耕治（農闘関係）は昭和六年六月、同盟中央部員高村某の勧誘にて同盟員となり、奈良県オルグとなり、市井清一及び黒田誠一（両名ともコップ奈良地方協幹部）を獲得して組織の確立に努め、また松田一郎、柳沢恭雄（在京在学中同盟に加入）等帰郷して運動に従事する等その運動も活発ならんとせしが、八月三十一日いずれも検挙せられたり。しかして右一斉検挙に於いては、右の外、全農全国会議派、奈良一般労働組合員、コップ関係団体等合計一二二名を検挙せられ、内四二名は送局せられたり。[1]」

奈良県社会運動史に言うところの八・三一事件であった。奈良署はもちろん、付近の警察署の留置

場はあふれかえり、ついには奈良署の演武場にまで被疑者を収容したこの事件に連座した人びとの中に、二人の奈良女高師の生徒がいた。小柄で、深い瞳に知性の輝きを見せて、テキパキと身を処していた陸軍中将の娘長戸恭、やや太り気味で中ぜい、下ぶくれの顔と豊かな髪、近眼鏡のためか目が細く感じられ、一見ひ弱い感じの長谷川テルの二人であった。

奈良市油坂町にあった奈良一般労働組合の事務所へ連絡をとりに長戸恭が現われ、この全協系とにらまれていた地方単独組合の書記であり、同時に作家同盟員であった大山峻峰と会ったのは、この年の六月ごろであった、と現在松阪市教育委員をしている大山は言う。もちろん当時の大山は二十歳そこそこで独身、のちにかれの妻になる河合秀夫――第五章に現われる――の娘はかれの視界の中にはいないし、ましてや、後年、自分が『邪馬台国を探る』というような本を書くことになるだろうなどとは考えてもいなかった。その大山に、長戸は校内の事情をいろいろと語った。ここ数年、年中行事とも言えるような左翼学生の検挙と放校は、ここでも学校当局を悩ませ、寄宿舎生活を百パーセントの監視下におき、進歩的な書籍を持ちこもうとした者は、ただちに小ジュウトメ的な戒告の対象とされ、教室での言動も厳重に監視されている、制服以外の衣服での外出はいっさい禁止されており……というようなことを大山たちに語った。

二、三日した午後のこと、今度は長谷川テルが来た。パラソルの訪問者は、ちょっとしたできごとであった。というのは、この非合法運動にとって若干の助けをするパラソルも、この当時ではそれほど普及していなかったし、それよりも左翼労働組合の訪問者とはほとんど無縁の存在であったからだ。おしろい気のほとんどない、目ばかり光らせた女の顔しか知らない労働組合員たちである。(こ

う言っているのは、労農運動の前線に立っていた、われわれヒラの活動家の話で、非合法運動の中央部にいる人たちとは、いくぶん事情がちがったかとも思う。もっとも、宮本と連絡をとっていた共産青年同盟の中央委員の某女も、オシロイやパラソルには縁がない人であった)大山が四十年後の今日も、長谷川のパラソルをおぼえているのは当然しごくのことであった。長谷川は言葉少なく、長戸が約束していた、女文字で自分たちのあて名を書いた封筒をさし出した。もちろん学校当局の目をくぐるためのものである。ともかくも「民主」化した今日から考えると、ひなゴッコぐらいにしか見えぬ非合法活動である。

コップ(日本プロレタリア文化連盟)奈良地方協議会ができたのは、この年の一月か二月のことで、当時のコップは、プロレタリア科学同盟支部・作家同盟支部準備会・演劇同盟支部準備会から成り立っていた。工場へ、農村へのスローガンが高く掲げられ、文化運動は労働運動と併行してサークル活動に打ちこんでいた。奈良では文化運動の力がまだまだ弱く、左翼の中心は農民運動にあった。全国水平社の中心部隊であった奈良の貧農は、この農民運動の左翼、全国農民組合全国会議派の関西地方の拠点であった。しかし、他の地方でと同じように、奈良の左翼も工場、とくに大経営にはほとんど根を持っていない。しかも奈良の大経営と言えば、その九五パーセントが婦人である繊維工場である。社会運動に関心どころか、自らそこへ飛びこもうとする姿勢を示した二人の女子学生の出現は、若い大山だけではなく、奈良の左翼一同にとって大きな話題であっただろう。

大山たちは彼女らのことを、全農県連の藤本忠良に告げた。藤本が共産党の奈良県オルグであることは、おそらく知らなかったと思う。そこで藤本が彼女らに会うことになり、春日野にある、前に志賀直哉が住んでいた家の前で会うことになった。このとき来たのは長谷川だけであった。そして労農

運動とプロレタリア文学との関連などを一くさり吹きこまれて引き上げて行った。これ以後、農民組合との連絡には長谷川が、作家同盟との連絡には長戸があたることになった。

大山がおぼえているもう一つの事件は、プロ科のグループと作家同盟の市井・長戸・長谷川らが猿沢の池からほど遠くないプロ科の会員の家の二階で会合したことである。このとき、彼女らは女高師内の不自由な生活をくりかえし述べていた。長戸が組織した文化サークルは数名の集まりであり、しかも二人を除くと、まずは平凡なる女教師の卵という程度のものであったらしい。また、この時代、ボエウ京都支部長の斎藤英三は、長戸・長谷川の二人に何回か会っている。大阪支部とも連絡があったかもしれない。

さて、八・三一事件。女高師の二人はこの日にはつかまらなかった。夏休みで長戸は名古屋に、長谷川は東京に帰省していたからである。そして、新聞記事差止めで何ひとつ知らない彼女らが奈良へ帰って来たところを、警察が襲撃したのであった。

「昭和七年、夏休を終えて全校生が寮に帰ってきた夜、多分九月の九日であっただろう、私達の学校は全生徒が大体寄宿寮生活をしていたのだが、その中から長谷川さんと長戸さんは警察に拘留され、そのまま学校には帰らなかった。

北海道や、朝鮮や、九州からと、あちこちから帰舎してきた私達は、それぞれの土産などを出しあって各室ともにぎやかであった。むし暑い夜で、私達の部屋も廊下に面した方はスダレをかけていた。部屋の中から見ると暗いだけの廊下を、白い服と佩剣のがちゃがちゃという音が通って行った。私は何となく、伝染病の発生かなと思った。しばらくすると、また白い服と、今度は五六人の

緊張した感じの足音とが引返して行った。拘留される長戸さんを送って出る同室の人達だったのだ。私達はその二人が赤だったのだと後で聞かされた。それだけで説明は不必要なその頃であった。私達の心持では、いわば長谷川さんが主魁であり、長戸さんはお人がよくてひっぱりこまれただけだという具合であったが、実際はどうだったのか、今思うと長戸さんにはずい分酷な感じ方で、長戸さんは長戸さんで、またそれらしい生き方を行っていたのかも知れない」[2]

「私達のクラスの名簿は身長順で、私、長谷川、楠瀬、長戸というのがその一番終りのところである」という水野破魔子は、高杉一郎訳『嵐のなかのささやき』を読んで検挙の日の思い出をつづっている。そして、長谷川たちの文化サークルの動きの一端も——。

「三人以上集まる時は、舎監に集会届を出さなければならないと御達しが出た。もっともそんな事を厳密に実行したわけではなかった。しかし私——おそらく私達——は、そんなお達しの裏にある力や流れには無関心であったし、それを不当とする事も学んではいなかった。

長谷川さんが金子ふみの自叙伝を持って来てくれた。庭一つ向うの寮から、本当は禁じられていた兵児帯姿で、私の居た寮舎の廊下に来ていた姿も思いうかべることができる。私はこの書物の暗さと、エキセントリックな表現がいやで——つまり私の物の見方はいつもそんなだったのである——しかし貸してくれた人への義理のような気持で大いそぎで読んでしまった。朴烈とふみが並んでいる写真ははっきり記憶している。

『私は吉野葛の方がいい、何ならいっそ泉鏡花でもいいわ』

本を返す時そんな憎らしいことを言った。谷崎氏の『吉野葛』は『盲目物語』と一緒にずいぶんこった装丁で出ていて、透明な哀しみをたたえた美しさだと私は思っていた。鹿児島の……久保田さんが、この自叙伝で大変感激していたのも覚えている。何だか、長谷川さんが同志を探す手段だったような気がするのだけれど、私はそれに落第したわけである。長谷川さんと話らしい話をしたのは、それが最後の記憶である」(3)

演武場に入れられていた大山が見たのは、やはりここへ収容された長戸の姿であった。長谷川はおそらく保護室に留置されていたのであろう。それ以前に大山はすでに長谷川たちのことを聞かれていた。知らぬ、と言いはると一〇名ばかりの柔道の猛者がモミクチャにしてくれた。二週間ばかりして、長戸の父が引き取りに来た。「国賊め」と演武場で、みんなの前で娘のほおをひっぱたいた。コンチクショウ、おれたちにあてこすってやがる！　若い大山たちは歯ぎしりした。

大山はもう一度長戸に会った。翌年の一月二十日すぎ、奈良検事局へ出頭して起訴留保処分を言い渡されたときである。検事局の待合室で母親付添いで同じように出頭命令を受けて来ていた長戸は、元気で笑っていた。そして長谷川が東京にいることを告げた。

これ以後、長戸恭の姿はわれわれの視界から消え去ってしまう。水野は、長戸が結婚したことを知っているが、それもそこまでである。『解放のいしずえ』という新旧二冊の「無名戦士の墓」に合祀された解放運動犠牲者の名簿の中にも、ナガトもキョウもヤスも出てこない。

東京で活動——中国人と結婚

長谷川テルについては、すでに第六章、第七章において、しばしば言及されている。ここで彼女のここまでの略歴をまとめてみると——

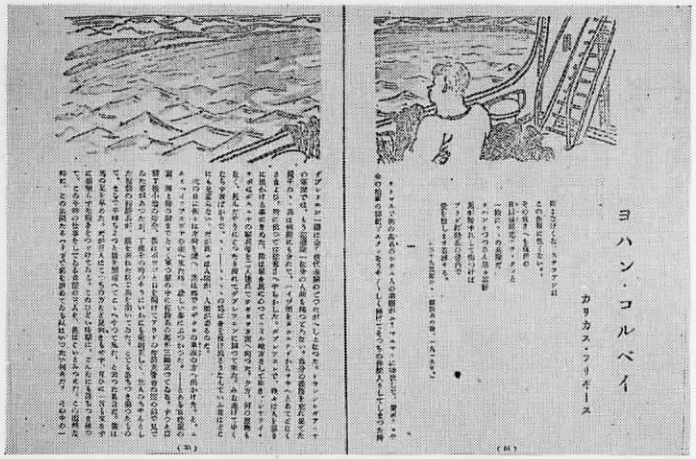
長谷川テル、本名長谷川てる子は、東京市役所土木課課長を勤めた長谷川幸之助の次女。姉ユキはのちに大阪エスペラント会の西村正雄と結婚、弟は弘。彼女は一九一二年三月七日、山梨県猿橋で生まれた。土木技師である父がこの地のダム工事で出張していたときである。その後、一家は東京へ移り、ここでテルは府立第三高等女学校を卒業する。そして奈良女高師入学、卒業まであと三月というところで退学。

エスペラントを学びはじめたのは、この事件の年の五月、奈良エスペラント会の宮武正道に教わった。宮武は天理外語でインドネシア語を専攻していて、のちに『エスペランチストのための日本語』というエスペラント書きの本や『大東亜語学双書』とかいうシリーズの中の『マライ語』を書いた人である。しかし、事件までにわずか五か月、テルたちのエスペラントもまずはホドホドの程度であったと考えてよかろう。八・三一事件におけるテルたちの関与の程度は明らかではない。留置場にいた期間が二週間ぐらいであることを考えると、共産党奈良県オルグの藤本の口からは、重要なことはまず出ていないとみてよい。いや、はじめからたとえ治安維持法をもってするとも、もともと問題にす

る方が、おかしいくらいの事件かもしれなかった。

一九三三年の春ごろであろう。東京へ帰って来たテルは、ポエウ系のエスペランチストと関連を持ちはじめた。タイプライタ学校を出てから、テルはしばらく日本エスペラント学会でタイプうちや雑務を無給で手伝っていた。創立者佐々城松栄を失って、同時にその進歩的精神をも怪しげにしていたクララ会はまだあった。新宿の白十字を根城にしてノーヴァ・クンシード「新しい会」なるものがあった。ここでは後日粛清される運命を迎えるポーランド生まれの革命家カール・ラデックが書いた『極東の戦禍』のエスペラント訳や、ポーランドの婦人作家エリーザ・オルジェシュカの『マルタ』を読んでいた。『マルタ』は、柏木ロンドに所属していた進歩的な劇作家清見陸郎がザメンホフ訳のエスペラントから訳して改造社から出版し、中条（宮本）百合子が激賞し、田坂具隆が翻案して「この母をみよ」というタイトルで一九三〇年に映画化した作品である。また、プロ・エスの人たちがやっていたルーマ・ロンド、その分身とも言える神田クンシード（「神田会」）などにもテルの姿が見られた。いささかジプシー的でもあるが、それほどにもテルはあせっていたのではなかろうか。

エスペラント文学研究会やマーヤ・ロンドにテルが関係していたことも既述のとおりである。奈良で国漢を選んだテルは、この時代に『堤中納言物語』の中の「虫めずる姫君」を訳し、当時出た『唯物史観日本史』の中のソ同盟の日本学者コンラード教授の論文をもとにして「日本文学小史」をエスペラントで書いた。「春の狂気」その他の短編小説をやはりエスペラントで書いた。「エスペラントでか、国語でか？」という苦悶のありありと認められるエセーを書いた彼女は、『ソヴェート・ハンガリーの一三三日』という本から「ヨハン・コルベイ」という短編を訳して、貴司山治がやっていた


ヨハン・コルベイ

カヨカス・フリギース

『文学案内』に掲載された「ヨハン・コルベイ」

『文学案内』という雑誌の一九三七年三月号に発表した。La Gvidanto Literatura（ラ・グヴィダント・リテラトゥーラ）という副題を持っていたこの雑誌は、作家同盟潰滅後に、自らエスペランチストでもある貴司と詩人の遠地輝武などがやっていて、エスペラントにも好意的であり、栗栖継（ベンネーム竹内次郎）や野上清の原稿などをよくのせていたのであった。カリカス・フリギースという、今日ではその母国ですらあまり知られていないらしいハンガリーの革命作家は、潰走するハンガリー・ソヴェートをささえる英雄の一人として、コルベイじいさんと呼ばれる元伯爵家の馬丁かなにかであった赤軍兵士を書いたのであった。「ハンガリーの労農革命」を研究した山口小静をテルが念頭においていたかどうか、それは明らかではない。ここではテルが書いた解説のうちから、同書に収められているエスペラント詩を、これまたテルの翻訳でかかげよう。伏せ字は原書によって埋めた。

百三十三日

一三三日、
彩るは朱、
満てるは闘い、
喜びと悲しみ。

一三三日
(反乱)
××の声、
旗は波うつ、
自由と美。

一三三日
プロレタリア××××(の勝利)、
壮烈な闘い、
——だが敗北。

一三三日——
強力な隊、
それを成す

我等の血と肉。

一三三日
裏切りのコーラス、
プロレタリアの栄誉を
うたいたたえつつ。

一三三日——
目ざす共有の白熱。
資本の匕首の
前に空しく。

一三三日
つづくは苦しみ。
ヤソの名による
地獄——白テロ。

一三三日——

すでに過去。
だが永遠に生きる
プロレタリアの胸中に。

一三三日
死をあざ笑い
呼声はこだまする
バリケードへ。

一三三日——
イコール我等。
我等は戦う
その日目ざして。

作者ネニーウ（「何者でもない」という意味のエスペラント）とは何者だろうか。日本のイーウ（伊東三郎）とのよい組み合わせであるが。ついでに書くと、ふしぎな運命のまわりあわせということで、テルは後にも石川達三の『生きている兵隊』をエスペラント訳するのであるが、テルの軍隊物にはしばしば誤訳がある。軍隊を知らぬ悲しさである。そういえば、刑務所を知らぬ服部亨が訳した島木の

『獄』にもヘンな訳語が出てくる。

上海エスペラント協会からクララ会へ要請してきた国際婦人デーにちなむ原稿「日本における女性の状態」もテルが書いた。これは『ラ・モンド』に掲載、さらに中国語にも訳されたと言う。

一言で言えば、東京時代のテルは、ポエウ系のエスペランチストと密接な連絡を保ちながら、日本エスペラント学会系の運動におけるフラク的存在、よくいえば接点にあたるところにすわっていた。恋愛事件？　あった。しかし実を結ばなかった。いろんな事情がくわしいことを書くことをさまたげるが、簡単に言うと、テルがふられたのであった。しかし、こんなことはどうでもいいことだ。

テルと劉仁の結婚記念写真

そのテルが三六年の何月かに結婚した相手は中国東北の生まれの劉仁（劉鏡環）で、東京高師の学生である。弟の劉維（劉介庸）も留学生で、農大にいた。二人とも日本エスペラント学会でエスペラントを学んでいたのである。

劉仁について、のちに中国でともに働いた鹿地亘（かじわたる）も青山和夫もあまりよく

書いていない。万事ひかえめで、テキパキした行動をとれない、ザラにある人物。これが鹿地や青山の文章から受ける印象である。おそらくは大陸の風土から生まれでた中国人の典型の一人であったにちがいない。もっともこのことは、劉仁が根がしっかりした男であったらしいこととは無関係である。

テルの結婚は両親の同意を得たものではなかった。炎の女にふさわしい行動である。

三七年のはじめ、あるいはその前年末に、まず劉仁が日本を離れた。行先は上海。故郷の東北へまっすぐ帰る道をとらなかったのはなぜだろうか。カイライ「満州国」政権が支配する地へオメオメ帰れば、留日学生としてその支配機構の中でトリモチにひっかかったトンボのような状態になることを知っていたからである。おとなしい劉も、なんらかの形で抗日戦に参加しようと決心していた、と断定してもよい。それはまだ空漠とした夢のような形であっただろうが。

日本脱出——嵐の中国へ

四月十五日、テルは東京の家を出た。結婚したといっても、夫と同居していたのではなく、依然、杉並区三谷町一五三番地の両親の家にいたのである。上海へ行くというテルの手紙で姉のユキは赤ん坊を連れて来ていた。そしてはじめてテルの結婚のことを聞いて驚いた。

「旅券のない私のために中国の友人たちが努力してくれた」[4]とテルは書いているが、これは何かの思いちがいではなかろうか。同じ時期に同じ国へ脱出を企てた宮本は、その当時の日本は、上海までの渡航になんの手続きも必要としなかった、とおぼえている。半植民地の代名詞としての上海があったのだ。旅券のたぐいが必要になったのはもう少し後のことと記憶するがどうだろうか。だとすれば「脱出」といっても、切符を買って船に乗りこみさえすれば、そこから先は警察の網の目にさえひっかからねばよいのである。大物ならばいさ知らず、テルぐらいならば、なんのこともない、大手をふって乗船すればそれでいいのだ。テルの脱出行に秘密性がないのは、このためであろう。

テルの持ち物はカバン一つ。その中には、抗日戦の全期間を通じてたたきつづけられたタイプライタ、姉ユキの結婚に力を貸した岡本好次の『新選エス和辞典』『新選和エス辞典』、それにたぶんサート発行の『エス・エス大辞典』が入っていた。このうちの『和エス』は、のちに重慶の霧の中で一九四四年、馮文洛が編さんして中華世界語者協会が発行した『世界語中文大辞典』の基礎資料のひとつになるだろう。

時は暮れゆく春よりも
また短きはなかるらん
恨みは友の別れより
さらに長きはなかるらん

島崎藤村の詩を思いうかべるテルを横浜港に見送ったのは、劉の弟、姉、叔母の高中きく、この出国に力を貸した鄧克強（ペンネームは丁克）ら中国のエスペランチストたちであった。父は玄関まで。病体の母、病気で休学していた弟も来ていない。中国の同志たちは「希望（ラ・エスペーロ）」を歌いはじめた。

新しい心が世界に生まれた

力強い叫び声が世界をかけめぐる

丁克・黄一環・葉君健らがその師中垣虎児郎とともに検挙されて、このテルの脱出行を助けたことを「コミンテルンの指令により、中国エスペラント大会に……」云々としめあげられるのは、このの ち七〇日のことであった。

背の高い、肩の大きく張った、四角い顔に強度の近眼鏡をかけた若い男が、前にいるやはり強度の近眼鏡をかけた女にエスペラントで聞いた。

「あなたは東京の婦人の同志でこういう人を知っていますか。ぼくの文通者だった人ですが……」

「まあ……よく知っていますわ、……わたしがその人で」

聞いた方は上海世界語者協会の機関誌『ラ・モンド』の編集者で、かつて東京高師にいた葉籟士、ペンネームはジェレーゾ、ロシア語の「鉄」と自分の本名の広東読み、ジェ・レーズをもじってつけた青年であり、聞かれた方は Verda Majo（ヴェルダ マーヨ）（「みどりの五月」）の名でこの雑誌に寄稿したことのある長谷川テル。

ジェレーゾと同伴して来た、いくぶん背の低い、肩幅の狭い、そしてオドオドしたような目つきの青年は張企程。後年 El Popola Cinio（エル ポポーラ チニーオ）（エスペラント版『人民中国』）の最高幹部となる男である。

「牛」のニックネームを持つジェレーゾ、「羊」と呼ばれた張の手引で、テルは何の違和感もなく中国エスペラント運動の中にはいっていく。同じ理想と同じ言葉、ちがうところは生まれ故郷の差だけである。

しかし、これはエスペランチストの間だけのことで、一歩「みどりの世界」の外へ出れば、事情は一変する。ひとりで買い物にも行けぬテルである。排日の波のなかで日本人であることを隠すことは大仕事であった。「中国の解放はアジアの明日への鍵である」と言いきったテルが、日本生まれであることをひたすら民衆の目から隠さねばならないとは！「家内はインドネシア生まれですから中国語を話せませんので」ということにした。劉と語り合う「インドネシア語」とはもちろんエスペラントである。三か国語、いや二か国語と一国際語でねごとを言う劉も、上海の文なし生活には閉口したであろう。エスペラントで派手に夫婦げんかをやって、しばしば隣人鹿地亘の夫人池田幸子を悩ますのは、もう少しのちのこと。

『日本評論』に載った「花はいかにして開いたか？」

七月十五日、上海世界語者協会主催でエスペラント五〇周年祭が開かれた。鄧や中垣が検挙される原因になった「中華世界語者大会」がこれに切りかえられたの

かも知れない。広東・北平、その他の各地から、上海のある学校へ集まった三〇〇名のエスペランチストは、蘆溝橋事件の数週間後のこととて、「エスペラントを中国解放のために」をスローガンとして、民族独立のためにエスペランチストはどうするべきかを熱心に討議した。

——たて、奴隷となるな　人びとよ
われら新しき長城を血肉もて築かん
——いざゆけ、いざゆけ、
日帝を打倒せよ、東北はわれらがもの。

「義勇軍行進曲」がエスペラントで歌われた。

この会合のあと、二、三か月後には、これらの人びとはちりぢりになった。ある者は国民政府と行動をともにし、のちには重慶へ行った。ある者は軍隊にはいり、またゲリラ闘争に移っていった。またある者は、西北の赤い星のもとに走った。「このとき集まった三百人のうちに、汪兆銘のカイライ政権に一時的な安楽を求めたものはひとりもいないことを」テルは確信しているのであるが、事実はどうであったのか。筆者たちはそれほどオプチミストではない。

この年の八月十日前後であろう。テルは『日本評論』一九三七年八月号とその編集長室伏高信の手紙を受取った。テルが夫の助けを借りて訳してこの雑誌に送った原稿がのっていた。「花はいかにして開いたか?」西安事件前夜をテーマにしたルポルタージュである。「支那青年将校の手記」、筆者は蘇睨、この国共統一戦線の端緒になった事件の悲劇の将軍張学良の部下らしい。それにしても、当時

の室伏はまだ自由主義の擁護者であった。「戦争小説号」と銘うっているとはいっても、その戦争小説三編のうち二編は、林房雄（まだ反動化していなかった）と村山知義の維新物、榊山潤の一編だけが、どうやら時局物であった。巻頭論文は山川均の「時局の認識」[5]。ここでは山川も後に巴金にかみつかれるようなことを書いていない。

室伏は訳者を中国青年と思ったらしく、これからもこの種のものをと頼んでいる。同号の編集後記に「西安通信の『花はいかにして開いたか?』は文学的才能のハッラッとしたもの、近来の好読物」とある。しかしこれは実現しなかった。「ある進歩的な文学雑誌の編集者」（『文学案内』の貴司山治?）との寄稿の約束もテルは果たすことができなかった。それにしても稿料五〇円はありがたかった。本当の露命をしばしつないだのである。とくに劉仁が日本銀行上海支店で換金した八月十二日の翌日、早くも日本軍の上海砲撃がはじまったことを考えると。

テルたちがエスペランチストの線を通じて日本国内へいろんな文書を送りこんだことの一端は、すでに第七章にも出ているが、この仕事は上海時代、それにつづくしばしの広東時代が最高潮であったことと推察される。政府当局もこれをキャッチしている。『特高月報　昭和十六年四月分』の日本共産党再建運動を図解した中に、テルに関連したものが二つある。その一つ「昭和十三年上半期組織図」は「中国共産党　劉鏡環　長谷川テル」が「第一次党再建指導部　橋本事長谷川博　牧野事平賀貞夫　伊井事伊東三郎　風早八十二　木村事岡部隆司」に連絡したことを示し、さらに長谷川が「旧党シンパ」、平賀が「全農本部　吉野事河合徹　長谷川事藤田三郎」と「旧ポエウグループ」に、風早が「旧産労グループ」と連絡していることを示している。もう一つの「昭和十五年度」の図表には、

同じ「中国共産党　劉、長谷川」が「橋本事長谷川博　井手ナホ」のグループと連絡があることを示している。当局がテルたちを「中共」としたのは早計であるが。

一九三七年十一月二十七日、日本軍制圧下の上海から一隻のフランス船が香港へ向けて出発した。この町を脱出する党、政府の要人、文化人の多くが乗っていた。郭沫若も何香凝（廖承志の母）も。しかし劉とテルはそんなことを知らぬ。

「突然、わたしはその場に釘づけになった。この同じ甲板、数メートル離れただけのところに日本人の夫婦が立っている。男はヨーロッパ人のように、女は中国の新婦人のようによそおっているが、まがうかたなき日本人である。わたしに気がついたのだろう。彼らもこっそり降りて行った」

テルの前に立っていたのは、かつてのプロレタリア作家同盟書記長、あの火中の栗を拾うような運命におかれて、作家同盟解散という敵前展開をやってのけ捕えられていた共産党員鹿地亘。女は河野さくらと別れた鹿地の第二の妻、池田幸子であった。

かれらの運命はもうひとりの日本人、青山和夫（本名、黒田善次）ともからみあって、数奇、いや、奇怪な展開を見せることになる。

抗日の怪放送

一九三八年十一月一日の『都新聞』は次のように報じた。

嬌聲賣國奴の正體はこれ
流暢日本語を操り
怪放送 祖國へ毒づく
"赤"くづれ長谷川照子
殊勝・捕虜も一役
防共維新軍江南で活躍
子照川谷長・女る賣を國祖

長谷川テルのことを報じた『都新聞』の記事（1938年11月1日号）

「〝嬌声売国奴〟の正体はこれ
流暢な日本語を操り
怪放送・祖国へ毒づく
〝赤〟くずれ長谷川照子
漢口陥落直前まで漢口放送局のマイクから流ちょうな日本語で激越な反日デマ放送をしていた日本女性の声が連日聞えてきたことは既報したが、この祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性の正体が武漢陥落と共に判明、三十一日夕刻、出先当局から警視庁外事課にもたらされた。この女性は杉並区三谷町一五三、元東京市役所土木課課長、長谷川幸之助氏（五八）の次女、奈良女高師中退の長谷川照子（二七）で、かつて〝赤〟の〝女闘士〟として暗躍中に中国留学生と〝赤い恋〟に結ばれて渡支したものである。

本年二月上旬突然香港放送局から女の声で反戦演説が行われた。しかもそれが歯切

れのいい流ちょうな日本語である。この放送を耳にしただれもがマイクの前に立つ覆面の日本女性は何者だろうと深い疑問を抱き、当局でもその正体を突きとめるため躍起となったが皆目わからなかった。ついで広東に現れて何回となく放送はくりかえされたのだ。

今夏わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや、今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍部のヒボウ、日本経済に関するデマが紅い唇にのせて毒づきはじめた。かくて去る二十七日午後五時三十分！　神速皇軍の威力が完全に武漢を圧したその刹那から、この怪放送はハタと止まってしまったが、間もなく覆面の女性長谷川照子の全貌が明るみにさらされるに至ったのだ。」

そしておきまりの「赤い恋」のイキサツや父の談話！

「怪放送」をキャッチしていたのは軍のエライさんだけではなかった。まず、羽仁五郎によれば、「ジャパン・クロニクルにヤナギザワ・ヨーコと名乗る日本女性が抗日運動を呼びかけていることが書いてあった」と言う。(6) このヤナギザワが長谷川であるか、それとも他の人かはわからぬ。また、「早稲田や神田の下宿屋の娘もいれば、女給もいる。留学生たちと愛しあっていっしょになり、おそらく周囲の冷たい眼に敢然と抗しながら、夫の祖国にやってきて、そこで思いがけない戦争にあい、上海・南京と次つぎに敵国人へのきびしい憎悪と迫害の中を、子供をかかえ、夫や親戚にまでかたみのせまい思いをさせ、生命をちぢめてきた女たち。国民党宣伝部ではそんな女たちの幾人かが、いわゆる蔣のデマ放送のアナウンサーに使われていて、おそらく政治についてはかつて理解をもとうとさえしたことのない彼女たちが、夫の国の社会生活にはじめて立ちまじる機会を得、祖国にいたら南京

陥落の旗をふっていたにちがいないのに、与えられたままの、自分に責任のない原稿を、戦線のむこうがわの親兄弟に向って悲しい矯声にのせていた」(7)と書いた男がいる。『都新聞』の記者と寸分ちがわぬ筆法で「矯声」と断じているのは、軍お雇いのジャーナリストではない。実にわが反ファシズム戦線の闘士、鹿地亘その人なのだ。この鼻もちならぬエリート意識にみちた、反マルクス主義的、いや反動的とも言える文章については、あとでもう一度たちかえらねばならぬが、とにかく対日放送に何人かの日本女性が活動していたことだけは確実である。少しのちのことを、青山和夫は「重慶では台湾人の林忠（現台北放送局長）が日本婦人二、三名とともに放送していた。この林忠の奥さんが第一次上海戦時代の『南京のウグイス』だった」と書いている。(8)

テルたちの放送を宮本の友人の堀鋭之助（本名、宮西直輝。第七章参照）も聞いた。かつて『フラート』をやっていた宝木寛の友人であり、ともに反戦運動をやった堀は、検挙、転向、執行猶予、召集とおきまりのコースを経て、このとき中支派遣軍の一部隊に電信兵として勤務していた。この放送を耳にした堀は、鹿地とちがって、鹿地のように屈伏した身を恥じたのであった。

まず童謡が聞こえ重慶放送は妨害電波しきりなる夜を
長沙作戦軍の動きをつぶさに伝う重慶放送に耳かたむける
鼻にかかった女の声す重慶放送いかなる過去を持ちたる人や
重慶放送その流ちょうな日本語をひそかに聞きておだやかならず(9)

上海から広東へ移り、生活苦の中にも漢口へはいる道を求めて苦労していたテルと劉。

ある日、思いあまった劉は郭沫若を訪問する。Uという、これも日本女性と結婚した官吏が同席していた。最近三人の子を生んだ妻との離婚を新聞広告した人である。劉仁は身の上を説明する。郭は黙っている。Uも。劉は郭の助けを求めようと、まず一息入れて口をきろうとした。

「悲劇だな」

同じように日本女性を妻とし、それを日本へおいてきた郭は一言だけ言った。

こんなとき丁克が帰って来た。「われらが抗日の英雄かえる」と新聞記事が大々的に報じた。丁克の父はこの地出身の有名な革命家で、丁克の本名、鄧克強というのは、おそらく父の友人、黄興の字（あざな）である克強から名づけられたものと思われる。

丁克はさっそく新しい家をもとめて、劉とテルを引き取った。それに若干のエスペランチストを加えて、その「緑の家」と名づけたところに作ったのが広東国際協会である。エスペラント部・日本語部・英語部に分かれて抗日のための国際宣伝をやろうとするのだ。ジェレーゾは漢口から意見をよせてきた。黄一璟は延安にもぐりこんだままで連絡をとれぬ。しかし、新しい力は中国民衆の中からいくらでも必要に応じて生み出されるであろう。前途は洋々である。

このとき、突然、テルに退去命令が出た。もちろんスパイの容疑にもとづいている。一九三八年二月のことだ。

ここでテルの自伝小説『戦う中国で』はプツリと切れる。そして続編はついに書かれなかった。かれらがどうして漢口へはいったのか、また本当に『都新聞』が報じるように香港で放送活動に従事していたのか、それを語る材料は残っていない。「警察国家日本を脱出してから三月目に、わたし

たちはこの悲惨な大戦に出会った。上海の戦火で見知らぬ広東の町に追いやられたわたしたち、そして妻は暗い牢獄にとじこめられた。その後、わたしたちは香港の貧民街に追いやられたが、ついに抗戦の中心である漢口へ来ることに成功した」と劉仁が妻の本にまえがきを書いていることだけが唯一の材料である。

いずれにせよ、テルはこのとき国民党中央宣伝部国際宣伝処対日科で、のちに駐日代表部へ来る崔万秋の下で働いていた。緑川英子という仮名はこの時分からのものであろう。そしてこの漢口時代の三か月が、テルにとって、また国民党内の良心分子にとって、ある意味の黄金時代であった。ここには、国、党、軍のすべてをあげての抗日がうずまいていたのであった。漢口陥落から重慶へ移ったとき、国民党右翼はもはや戦意を失い、その上層部はしだいに腐敗し、利権追求と戦後処理への貪欲なもくろみが支配しはじめ、悪いことにはそれが日本人の間でも、青山対鹿地の公然隠然の暗闘となって現われていた。こうした所にはみどりのハトが羽をのばす余地がなかった。

それにしても問題になるのは鹿地亘である。『火の如く風の如く』を一九五八年に書くまで、鹿地は「娘への遺書」の中に「お前もおぼえている劉仁さんと緑川のおばちゃんもいたし」と一言触れているだけである。青山和夫が、鹿地の言うように、ハッタリ屋であることにまちがいはなさそうだ。日本共産党代表、日本無産党代表、労働組合全国評議会代表などの肩書きをあとからあとからつけているのもおかしいが、もっと笑止なことは、自分が日本戦闘的無神論者同盟にいたことを利用して、国際戦闘的無神論者同盟の線があったからなどと言っていることである。この反宗教運動の組織は、イーペ（プロ・エス・インター）などとほぼ同時に、スターリン政権下にあって亡ぼされているのだ。少

なくとも活動をいっさい停止させられているのである。

しかし、それでも青山はテルたちに対して、少なくとも悪意ある書き方をしていない。鹿地に対しては、あらん限りの悪口雑言をたたいてやりあっているのだが。ところが鹿地は、テルや劉が登場した青山の本が出た翌年に発行した『火の如く風の如く』で、二人のことをいくぶんかくわしく書いて、しかも、前述のようにテルを「矯声」の主として取り扱ったり、劉をコソコソする男のような印象を与えることに努めているのである。「成倉（鹿地の下にいた反戦同盟員）たちはおしゃべりどものたまり場になる劉仁たちのところによく出かけ、ろくでもないウワサ話をききこみ、自分の方からもしゃべり、それが劉仁や兵たいたちからひろがり……」「日ごろ挙動を不審に思われていた文化工作委員会のある職員が、顔を出しているのを見かけたというものがいた。（劉仁だ）」というたぐいである。そして、劉やテルの正常の活動については、その所属とテルの対外放送について書いているだけである。自分のことについてもどうやら百パーセント真実を語っていないもようである。たとえば、重慶時代に鹿地がアメリカ側機関と接触していたと思われるのに、（このことが後日の鹿地事件を生んだのであろう！）そこらはすっかり抜け落ちている。戦後、帰国した鹿地と日本共産党中央部とのイキサツについては「また聞き」の範囲しか出ないので、明言することはできないが、鹿地という人はどこまでも疑問の人物である。あれほど青山についてクドクド書くくらいならば、たとえ劉に好感を持たずとも、同僚のテルの具体的な仕事について書き残す義務があるのではなかろうか。あの困難な場で作家同盟の後始末をやってのけた鹿地に、このことを期待するのはエスペランチストばかりではあるまい。もっとも鹿地が書けない、書きたくない理由も推察できそうな気もするのだが。

それにしても、わたしたちが青年の日から尊敬してきた鹿地よ、「矯声」と書いた君は、中国の作家、田間が「V・M[10]へ」という詩をテルのために書き、君たちとともに重慶へ行った朝鮮のエスペランチスト、安偶生（ペンネームはエルピン、日本帝国主義の巨頭伊藤博文をハルビンで射殺した民族主義革命家の安重根のオイである）が、次のような詩をテルにおくっていることを知らぬはずはないと思うのだが——。

平和のハト

中国放送局で日本語放送に従事している日本の婦人エスペランチスト、ヴェルダ・マーヨにささげる

戦争で狂ってしまった東洋で
オオカミやヘビの前のヒツジのように平和なあなたは、
もがきながらも大胆にすべてを見通している。
あなたの心の奥底には美事な計画が立てられている。
そして、あなたは祖国と両親を
大空のはてに飛び立つように捨ててきた、
人類にいつまでもふさわしい平和な生活を
いつの日か、かれらに与えることをかたく信じて。

いま、あなたはメガホンの前に立ち
あなたの同胞に真実を告げる　予言する。
あなたの声はおだやかであるが
雷鳴を呼びおこす力を持っている、
健全な良心を持つ魂に箴言を与えるのだ。
あなたの声がむなしくなることはない、
血に酔いしれた心をずたずたに裂き
苦しみを与えずにはおかないだろうから。

友よ、何をあなたに望めばいいだろうか、
ああ、海のかなたの国から来た平和のハトよ、
そうだ、あなたは籠から逃げ出してきただけではないのだ。
青春の燃える血のために
砂ばくのように倦怠した魂と共に
サクラ咲く国で無気力な生をむさぼることができなかったのだ。
ああ、五月（マーヨ）よ、このおそろしく灰色の太陽のない野原に
秋のとりいれのために緑の色に崩えあがるがいい。

冬来たりなば——重慶で

以上のようなわけで、重慶へはいったテルの仕事については、放送に従事していたという以外には何もわからない。そして腐敗。腐敗はなにも国民党幹部の間だけではなかった。日本人同士でも青山と鹿地がテルを間において、見ぐるしい争いをつづけていた。二人の著書をつきあわせて整理してみれば、けっこう一冊の暗闘史ができあがるだろう。どの男とどの女が怪しい、というようなつまらぬことだけでも、ずいぶん書かれているし、書かれていないウワサさえ筆者の耳にはいっているくらいである。

こうした事情は、テルの著述活動に結果として拍車をかけたことになった。三八年十二月十五日、ザメンホフ祭の日に「全世界のエスペランチストへ」訴えるアピールを書いている。「われわれエスペランチストは本質的に平和の前衛であらねばならないし、したがってまた、われわれの周辺に統一戦線を拡大して、エスペランチスト以外のものまでそれを拡大していかねばならぬ。……こうした実践を外にして本年のザメンホフ祭を記念するにふさわしい行動はありえない」こう書いたテル、すでに上海時代に「日本のエスペランチストへ」というアピールを書いていたテルは、愛する姉ユキの夫西村正雄が、「昨年九月内閣情報部がひろく国民から募集し、応募五万七五〇〇余首のうちから一等に当選し、さらに瀬戸口藤吉氏の当選曲を付して、全国民に愛唱されている『愛国行進曲』をエス

ベラントに訳して、日本国民の意気をひろく世界に示したい」[11]という日本エスペラント学会の恥ずべき呼びかけにこたえて、大阪エスペラント会の名をもって応募して二等に入選していたことを知っていたのだろうか。(一等は前述のとおり宍戸圭一工学博士)。

それからテルは下村千秋のルポルタージュ「日本農村は飢えている」を『革新』二月号から訳し、「失われた二つのリンゴ」「代用品時代」――戦時下日本の風俗画」を書き、スペイン人民戦線軍のエスペランチスト部隊の司令官ローゼネルン・マンガダ、マドリード陥落で行方不明になっているこの同志あてにメッセージを書いた。このメッセージの題にした「冬来たりなば春遠からじ」という詩は奈良時代から愛唱していたものであった。

一九四〇年一月、延安の毛沢東が『新民主主義論』を発表したとき、テルは「日本学生のプロフィル」を書いて荒木文相を批判し、三月には「戦いながら前進する」で中国ゲリラ部隊で戦う婦人の姿を書き、その文を「全中国の婦人が決起したとき、抗戦ははじめて勝利するであろう」という、毛沢東が延安の女子大学生に語った言葉で結んでいた。

これらの文章が Flustr' el Uragano(フルーストル・ニル・ウラガーノ)(『嵐の中からのささやき』)という小さいパンフレットにまとめられたのは一九四一年十月のことである。[12]このパンフの中から、彼女がずっと以前一九三七年八月、上海時代に書いた文章を一編全訳しておく。

愛と憎しみ

火と煙がこの国際都市をおおっている。恐怖と不安の叫びが上がっている。

おそろしく静かな午後の空気をつんざいて砲声がとどろきはじめた。いま、そこで、数百人が倒れたのにちがいない。ある者は音もなく最後の息をはき、他の者の血ぬられた身体は泥まみれになって瀕死にのたうっているであろう。

青い大空を背景にして銀色の飛行機の影があざやかにうつる。突然、それが爆発した。消えてしまった――あとには二筋、三筋、白い飛行雲が尾をひいているだけだ。

フランス祖界の貧民街のすみずみには真黒けの避難者たちがアリのように集まっている。どこへ行っても、しわだらけの、マメだらけの、あるいはちっぽけな手が、ほどこしを求めてさしのべてくる。

――だれがこうさせるのだ？　日本人か？

――いや、――わたしはあわてて頭をふり、全身の嫌悪をこめて答える。

――日本帝国主義者だ。

夜。射撃の音で目がさめる。もう眠れない。わたしはバルコニーへ出た。東北の空はふるえあがらせるような美しさで真赤である。一九三二年の夜にもこの火は燃えていた。そして、いま、この火は、上海、北平、天津だけではなく、日本自体にも大きな影響を与えたユニークな数千年の文化を持つ中国全体をおびやかしているのである。それに、もしも風がこの火をかきたてるならば、遠くスペインの国で燃えている火といっしょになって、全世界を地獄の火をもって包みこむかもしれないのだ。

しかし、きょうのところは、まだこれ以上……？

いや、いや、その灰色の大きな煙が、日本の人民自身をしめ殺すようにおさえつけていることを、わたしは決して忘れてはいない。日本、この侵略者の国……そしてわたしの愛する祖国。

わたしの前には日常必需品の値上がりで苦しむ労働者の絶望的な顔がうかぶ。わたしの耳に聞こえてくるのは、戦争のために子や夫を奪われた老いたる農民、婦人の泣き声だ。そして、いま、この瞬間、上海の業火の下にあるのは、わたしの二十年来の家族、日本から来た友人たちだ。

わたしはするどい痛みをおぼえる。

わたしの心は叫ぶ！　両国人民のために戦争をやめろ！

とはいうものの、従来のような中国人民の屈伏を条件とする「いつわりの平和」をわたしは願っているのだろうか？　いや、百べんも否、千べんも否だ！　中国人民は自らの血と肉をもって自由をあがなわねばならないのだ。その一面、「究極的な平和」を戦いとることは、日本人民の援助があってのみ可能であることを、中国人民はすでに知っている。

このために活動する日本人があまりにも少ないので、わたしは残念と怒りにさいなまれているのである。全能の権力のもとで日本人民は戦争のことを語りたがらない。これは非人道的な侵略に対する不承不承の同意ではなかろうか？

情報がはいった——

「下船を拒んだ日本兵士を死をもって脅かすことによって、かろうじて上陸させた」

「東京の日中学生一〇〇名が反戦行動のために銃殺された」

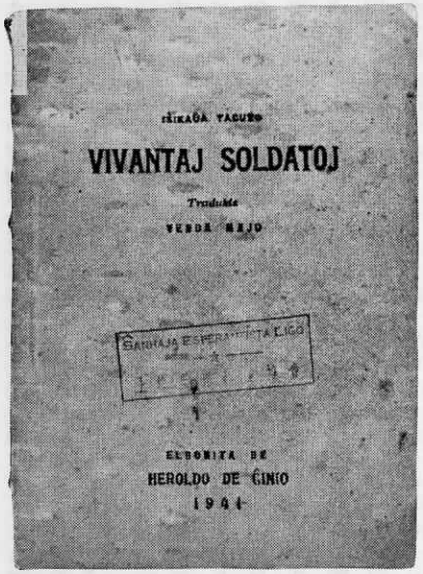
血のバラがわたしの胸に咲く——おさえきれぬ奔流、強く、強く圧迫されていた本当の感情の一

片を、わたしは見たのである。

わたしは日本を愛している。——たくさんの思い出があり、わたしの両親、姉と弟、親族の人たち、友人たちが暮らしている故国であるからだ。

わたしは中国を愛している。たくさんの親切な、勤勉な同志たちが、わたしをかこんでいる新しい祖国であるからだ。

わたしは憎んでいる。両国人民の殺リクを、わたしは全身をもって憎み、憎みに憎んでいる。どちらの人民が犠牲になろうとも、たちきれぬ悲しみに、わたしはおぼれてしまうだろう。



『生きている兵隊』のエスペラント訳の本

エスペランチストとして、国際的な文化愛好者として、強盗どもの爪から中国文明を守りたいと、人間として、わたしは願っている。女性として、わたしは本能的に平和を求めている。

しかし今は、もしもそれが可能でありさえすれば、わたしは喜んで中国軍へ身を投じたいと思っている。なぜならば、この軍隊は民族の独立のために、日本人民に対してではなく、日本帝国主義に対して戦っているからであり、

さらに、その勝利が東洋の明るい未来を約束するものであるからだ。
同時に、同志たちとともに、大声をはりあげて日本の兄弟たちに呼びかける。
――誤って血を流してはならぬ。あなたたちの敵は、ここ、海のこちらにはいないのだ。

文中の「わたしの二十年来の家族」というのは、誤植であり得ても、筆者の誤訳ではない。おそらくはカモフラージュのためにテルが入れたことばであろう。

テルのもう一つの仕事、石川達三の小説『生きている兵隊』のエスペラント訳には、四一年七月の序文がついている。[13] 戦争描写に忠実すぎた石川が、そのことによって『中央公論』編集者とともに処罰されたことは周知のとおりであるが、この発売禁止の雑誌が中国に送られ、諸方面から賞賛され、中国語訳やエスペラント訳が現われたことが、石川たちの処罰に影響を与えたことも確実であろう。

すでに中国のエスペランチストたちは一九三八年に、いわゆる「田中覚書」のエスペラント訳を発表している。[14] 当時の首相田中義一大将が天皇に提出した侵略プログラム――アジアを制するには中国を、それには第一に満州を、ついで北支を、というもの――が何者かによって宮中から盗み出され、コミンテルンの手に渡ってモスクワで発表されたという因縁つきの文書である。

テルは真珠湾攻撃に先立つこと二か月、長男の星星を生んだ。エスペラントで呼ぶ「ステルチョ」(星ちゃん)は緑の星か赤い星か。

しかし重慶でテルたちが中国共産党と密接な関係を結んだあとは見られない。中共側から遠慮されたものと思われる。これには鹿地の書いているような劉仁の性格もあずかって力があったただろう。

そして最後の著述 En Cinio Bafalanta (エン チニーオ バタラ ンタ)(『戦う中国で』)が書きあげられるのは、東条内閣が倒れ、小磯内閣が成立した一九四四年七月ごろである。(この章のとびらの写真参照)

第一部、日本脱出、上海・広東の生活から香港へ。第二部漢口時代、第三部重慶時代、という予定だけは書き残されているが、できあがったのは第一部だけである。第二部以下が書かれなかったのは、ほぼ確実である。しだいに反動化する重慶の生活は、テルをしめあげてしまった。しかし、日本敗戦の年、重慶の世界語函授学社(エスペラント通信学院)から、この本は発行された。きわめて粗末なセンカ紙に、おそらく手刷り印刷機で刷られ、「在戦闘的中国」という中国語の副題をつけたこの小さい本は、戦後、国際通信が自由になった日本へ、相当部数流れこんでいる。それは日本の進歩的エスペラント運動の大きな精神的ささえになった。北さとりと宮本の抄訳が『婦人民主新聞』に連載されたのは一九五一年七月八日号からであり、この少しばかりの原稿料が、タイプ謄写の『長谷川テル著作集』四冊を中国の同志の援助とともに完成させたのである。もちろん、戦後の不便な時代のことで、テルの文章のことごとくを収集することに成功していないのであるが。

しかし高杉一郎はこのプリントから『戦う中国で』を全部と『嵐』の中から三編を訳して『嵐のなかのささやき』として単行本にし、[15] 臼井吉見は『現代教養全集』第八巻[16]に『戦う中国で』から二章を収め、[17] 遠山茂樹も高杉の訳本をを元にしてテルのことを書いている。[18]

なお、利根光一の『テルの生涯』が言っているような「在戦闘的中国」という中国語の訳本は存在しない。プリント本の表紙に使った原本の表紙の複製を見てトチったのであろう。

北の空に消えた星

これから先のテルの足どりについてくわしくはわからない。青山和夫が重慶を出たのは敗戦の年の十二月十五日の朝である。かれはその前日テルに別れを告げている。[19] 鹿地は例のようにテルについては沈黙している。

この年の晩秋、星野芳樹が上海で劉夫妻に会ったと言う。[20] 青山の記述に誤りがあるのか、今になってはたしかめようもない。星野の話は、前掲利根光一の本によるものであるが、おそらく利根はテルの姉ユキが住む沼田市で、直接にか間接にか星野の話を聞いたものであろう。

このときテルは夫とともに六歳か七歳の星星を連れていたというから、もしもこの「六歳か七歳」にこだわると、星野の記憶がずれていることになるだろう。何のために星野をたずねたのかはわからぬ、というのが利根の記述であり、おそらく星野の談話であろうが、星野の経歴を知っている人間にとっては、容易にわかることなのだ。一九三三年ごろ、この「満州国」高官星野直樹の実弟芳樹は日本共産党関西地方委員長であった。三五年のたぶん秋ごろだと思うが、星野の公判があり、その法廷で星野は非転向を表明した。「赤魔星野」と『朝日新聞』が伝えていた。その後かれは獄中でエスペラントを学び、また転向した。獄中でか獄外でか忘れたが、「法華経」のエスペラント訳をしたとかいうことを、自著『共産主義卒業の記』に書いていたと思う。テルが知っていたのはこの「赤魔星野」

の名であったのだろう。とすれば、かれを訪問した原因は、いわずともしれている。故国の仲間たちの消息をもとめ、さらにあわよくば、かれらとの連絡を依頼したかったのであろう。しかし、星野は人が変わっていた。帰国後、数寄屋橋で引揚促進のためと称してハンストをやり、それを足場に参議院議員に当選するような男になっていた。テルは何も言わずに別れて行ったのである。

次にテルが現われるのは奉天である。[21] 二人の子供を連れて劉夫妻が、レントゲン技師である長谷川兼次郎の家の二階を借りたのである。同姓のよしみでか、すっかり心やすくなったテルは、星星の胸につけていたエスペラントの緑のバッジをはずして、兼次郎の娘の七葉の胸につけ、引揚げたとき届けて欲しいと杉並の実家を教えた。

次に劉夫妻の消息を聞くのは——由比忠之進の口からである。

「長谷川さんが、終戦後まもなく、重慶を去って北京方面へ行かれたということは、上海から引揚げられた星野芳樹氏や、つづいて蘇州から帰られた法華日良氏から伝えられ、その元気なことがわかって喜んでいたのであったが、そののちの消息は、まったくわからなかった。

長谷川さんの死を由比氏からつげられたとき、それも一九四六年春のことというのであるから、星野、法華両氏の話などを思いあわせて、ほとんど由比氏の言葉を信じることができなかったが、長谷川照子という、その人の本名さえ知らない由比氏の話も、よく問いただしてみれば、疑いようもないことであった。

——ソヴェトか中国の同志に出あいはしないかと、いつも緑星章をつけ、また、接する人ごとにエスペラントのことをたずねたが、たったひとり中国人のエスペランチストに出あった。牡丹江の紡織会社の劉維という人であった。この人が緑川女史の義弟であった。と由比さんは話された。

……

劉維氏の話によると、重慶から帰った夫妻は、佳木斯（チャムス）にいたのであったが、一九四六年の春、劉氏が病気でなくなり、それにひきつづいて、緑川女史も病死され、のこされた子ども二人は、劉維氏が引きとって養っているというのである。[22]」

そして三宅の話はもう少しつづく。

「そのころ、中国の同志から、シンガポールをとおして送られて来た抗戦エスペラント文書のなかに、しばしばみられた Verda Majo という名が、長谷川照子さんのことであるのは、たやすく想像されたが、これは、特高にかぎつけられなくてすんだ。」

それにしても、東京農大に学んだ劉維が紡織工場に、しかも故郷を遠く離れた牡丹江あたりで働いていることは、大戦のまき起こした小さいうずとも言えようが、テルの行動はナゾに包まれている。なぜ夫の故郷の遼陽へ行かずに、奉天や佳木斯へ現われたのであろう。満州へ進撃してきたソ同盟——いや、このリアリスチックな国家のことを、かつての導きの星としての「ソヴェート社会主義共和国同盟」と呼びたくはないから、お望みどおりにソ連と言おう——そのソ連軍の態度と、それにつづく国共両軍の衝突を考えるほかはないであろう。

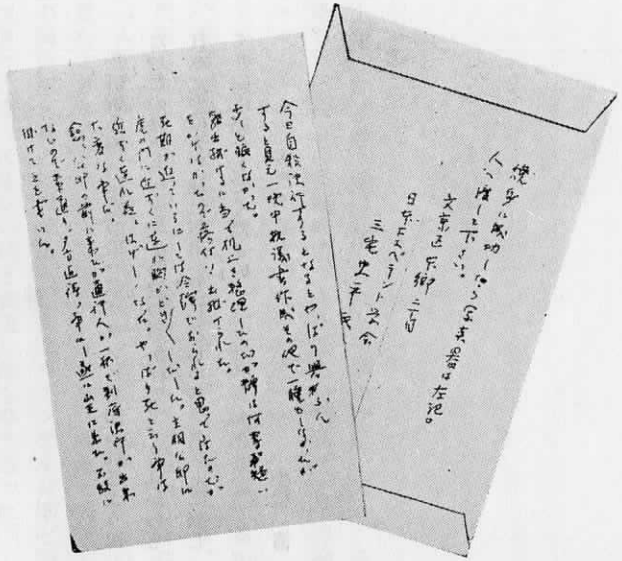
大陸の北の空に消えてしまった緑の星は、世界の進歩的なエスペランチストの胸に永遠に生きているし、将来も消えうせることはあるまい。理想を忘れ果てて目前の利害に終始する人ばかりの世の中に堕落してしまわないかぎりのことであるが。

注

1 『特高月報　昭和七年十月分』
2 水野破魔子『女高師村晩景』一九七一年　私家版。
3 同右。
4 以下、テルの文章からの引用は、テルの自著 Verda Majo : En Ĉinio Batalanta（『戦う中国で』）一九四五年　世界語函授学社、復刻版一九五一年　エスペラント通信社、同　一九五四年　日本エスペラント図書刊行会。
5 巴金「山川均先生に」『中国』一九六七年十二月号に訳載。
6 羽仁五郎『日本人民の歴史』一九五〇年　岩波書店。
7 鹿地亘『火の如く風の如く』一九五八年　講談社、統編も参照のこと。
8 青山和夫『謀略熟練工』一九五七年　妙義出版。題を変えた再版があるもよう。
9 堀銳之助『記録』一九六六年　私家版。
10 世界抵抗詩刊行会『イェンアンからペイチンまで』一九五一年　大月書店。
11 「愛国行進曲エス訳懸賞募集」La Revuo Orienta　一九三八年三月号。
12 Verda Majo : Flustr' el Uragano. Heroldo de Ĉinio（『嵐の中からのささやき』）（重慶）一九四一年、復刻版　一九五二年　エスペラント通信社。
13 Iŝikaŭa Tacuzo : Vivantaj Soldatoj（『生きている兵隊』）1941, Heroldo de Ĉinio（重慶）、復刻版　一九五四年　エスペラント通信社。
14 Tanaka Memorando,（『田中大将覚書』）Orienta Kuriero N-ro II,（香港）一九三八年。

15 高杉一郎訳『嵐のなかのささやき』一九五四年　新評論社。
16 臼井吉見編『現代教養全集　わが生涯』一九五九年　筑摩書房。
17 遠山茂樹「生きている兵隊」『日本歴史物語』第七巻　一九五六年　河出書房版に所収。
18 利根光一『テルの生涯』一九六九年　要文社。
19 青山和夫　前掲書。
20 利根光一　前掲書。
21 同右、および本間七葉の談話。
22 三宅史平「ふたつの死」La Revuo Orienta　一九四九年十二月号。

第十章　雲と火の柱——戦後の運動



由比忠之進の遺書